

海外語学研修の効果測定（2）

野中辰也

Assessment of a Homestay Program (2)

Tatsuya Nonaka

1. はじめに

本研究は、野中（2005）の続編として、短大で実施している20日間の「海外語学研修（以下「研修」）」の効果測定結果について追加報告する。

本研究の動機付けは、野中ほか（2001, 2002）、野中（2005）に引き続き、英語運用能力養成に効果をもたらすexposureの量について実証的根拠を示すことにある。野中（2005）では、アメリカでのホームステイ形式での短期語学研修を経験した短大1年生51名を対象として、研修前後の英語運用能力の変化を測定した。英語力標準テストITP Pre-TOEFL¹⁾を用いた測定により、以下のことがわかった：

- 1) 研修参加前後で、参加者全体の総合的な英語運用能力の上昇は確認できなかった。
- 2) 特にPre-TOEFLの総合スコアが350点以下といった英語運用能力レベルが低めの参加者については、リーディング力と総合的な英語運用能力の上昇が確認できた。
- 3) 参加者の英語運用能力に関わらず、個人差が大きい部分もあり、参加者によっては、研修前比20%超といったスコア伸び率を示す例も少なくなかった。

上記の結果は、20日間という短期間ではあっても、集中的に英語を聞き・話すというexposureが参加者の英語運用能力向上をもたらすのではないかという筆者の予想に反したものであった。特に、リスニング能力向上に有意な違いが見られなかった点は、研修後の参加者の様子を観察した印象からすると違和感があり、再度の検討の必要性を感じさせるものであった。

そこで、本稿では、野中（2005）で報告した以降の研修に参加した学生を被験者として、その効果測定を行ない、研修により参加者の英語運用能力に変化がみられたか否かを再度検討する。

2. 研修概要

2.1. 研修の位置付け

本研修は、短大の人間総合学科在学生のうち英語科目を主に履修している学生（履修科目全体のうちの6～7割程度が英語科目）を対象としており、約3週間のホームステイを通しての英語運用能力伸長と異文化理解を目的としている。研修は「海外語学研修」という授業科目として、それぞれ6ヶ月間の事前・事後指導を含んでいる。

2.2. 研修先・期間・内容

研修先ほかについては、野中（2005）と同様である。研修先はアメリカ・ワシントン州のシアトル郊外で、研修期間は短大1年次末の20日間。研修参加者は、20日間のうち、平日13日間は現地スタッフのもとで英会話授業（午前中）や見学（午後・終日）を行ない、それ以外の時間帯は個別に1家庭にホームステイをし、さまざまな活動を行なう。授業科目であるということもあり、日中の授業や見学の際には、日本人間同士を含めて英語のみで生活するように引率教員からの指導がなされている。そのため、中学校・高等学校ほかでの異文化理解を主目的としたホームステイプログラムと比べて、参加者が積極的に英語を使用する機会は多く、動機付けも高くなっていると考えられる。

2.3. 研修参加者

今回分析に使用したのは、2004年度から2006年度の研修に参加した短大1年生29名のデータである。各年度の研修参加者数は下記のとおりである：³⁾

2004年度 9名

2005年度 11名

2006年度 9名

研修参加者は短大で英語科目を中心に履修しているが、研修参加前の英語運用能力はhigher elementaryからlower intermediateのレベルであると考えられる。研修参加にあたっては、その要件として実用英語技能検定の準2級取得を課しており、研修参加以前に全体のほぼ全員が準2級資格を取得済みであり、同検定の2級資格を取得済みの学生も若干名いた。さらに、研修前の英語運用能力をTOEIC IPテスト⁴⁾で測定したところ、全体で平均点392.1、最高点630、最低点195、標準偏差95.15という結果を得た。

3. 研修の効果測定

3.1. 効果測定の方法

研修参加者の英語運用能力変化を客観的に測定するため、研修開始前と研修終了後ほぼ1ヶ月の時点にそれぞれ英語運用能力テスト（TOEIC IP）を実施した。⁵⁾ テスト結果をもとに、TOEIC IPの「総合スコア」および「リスニング」「リーディング」各セクションのスコア変化をt検定により、それぞれ比較検討した。その後、研修前の総合スコア成績の上位群と下位群それぞれについて、研修前後のスコア変化をウィルコクソンの順位和検定で検討した。なお、TOEIC IPの素点については、Appendixにまとめた。

3.2. 結果と考察

3.2.1. 全体傾向

表1は、研修参加者全体のTOEIC IPスコアの変化をまとめたものである。

表1：TOEIC IPスコア変化(N=29)

	リスニング		リーディング		総合スコア	
	研修前	研修後	研修前	研修後	研修前	研修後
平均点	236.7	266.7	155.3	156.0	392.1	422.8
最高点	325	345	305	250	630	595
最低点	110	180	70	90	195	310
標準偏差	55.82	44.94	53.69	38.04	95.15	71.23

表内のデータから、まず、総合スコア平均点の約30点の上昇が見て取れる。この得点上昇については、統計的にも有意差ありという結果を得た(両側検定： $t(28)=2.429$ 、 $p<.05$)。この結果から、研修を終えて参加者全体のTOEIC IPスコアで測定できるような英語運用能力の上昇が見られたといえる。一方、サブスコアについては、リスニングパートには30点のスコア上昇が見られ、その差に有意差が確認された(両側検定： $t(28)=3.059$ 、 $p<.01$)が、リーディングパートのスコア変化については有意な差は見られなかった。

上記の結果は、いずれも筆者の直観と相容れるものである。20日間という短期間とはいえ、参加者ひとりひとりが個別の家庭に滞在し、日本語を解さない相手と英語によるコミュニケーションをし続けるというだけでも、特にリスニング力にははっきりとした効果が現れるということが実証されたといえよう。一方、20日間という研修期間中に集中的なリーディング活動が必要とされるような場面がないという研修の内容を考えれば、リーディング力に大きな変化がない点は納得のいく結果と考えられる。

なお、上記の結果は先行研究である野中(2005)の結果とは異なるものであるが、先行研究と今回の研究では、効果測定に使っている英語運用能力測定試験が違う点を考慮しなければいけないかもしれない。いずれにせよ、この点については、今後もデータ収集と効果測定を継続し、安定した分析結果を得ることによって、解明を図りたい。

3.2.2. 事前英語運用能力別傾向

表2は、研修参加者29名のうち、研修前のTOEIC IP総合スコアの上位9名(以下「上位群」と同下位9名(以下「下位群」)のデータを、表1にならってまとめたものである。

表2：TOEIC IPスコア変化成績別

		リスニング		リーディング		総合スコア	
		研修前	研修後	研修前	研修後	研修前	研修後
研修前 総合スコア 上位群 (N=9)	平均点	287.8	300.6	211.1	193.9	498.9	494.4
	最高点	325	345	305	250	630	595
	最低点	245	255	170	160	460	415
	標準偏差	22.87	33.45	39.71	31.69	49.76	55.35
研修前 総合スコア 下位群 (N=9)	平均点	175.6	229.4	107.8	130.6	283.3	360.0
	最高点	235	280	135	165	350	415
	最低点	110	180	75	90	195	310
	標準偏差	45.79	29.95	19.31	23.03	50.22	36.97

表内のデータについて、上位群ではいずれの項目も平均点について有意差が確認されなかったのに対し、下位群では「リスニング」(両側検定： $t(8)=1$ 、 $p<.05$)と「総合スコア」(両側検定： $t(8)=3$ 、 $p<.05$)で有意差が確認された。これは、Appendixにまとめた総合スコアの変化を見るとさらに顕著で、上位群には得点が上がった参加者と下がった参加者がほぼ半数ずついるのに対して、下位群では1名を除いて全ての参加者の得点が上昇している。こうした結果から、特にTOEIC IPスコアが350点未満レベルの英語運用能力の参加者に限って言えば、リスニングと総合スコアについては、研修の効果が期待できるといえるかもしれない。

研修の効果は上位群よりも下位群に顕著に見取れるという結果は、野中(2005)でも確認されている。今回も引き続き同様の結果を得たことにより、研修は英語運用能力が低めの参加者には十分な効果があると考えてもよいかもしれない。ただし、今回は総合スコアとリーディングに変化が見られたのに対し、今回は総合スコアとリスニングに変化ありという結果を得たということで、さらにデータを蓄積し、より納得のいく結論を導き出したい。

一方で、なぜ上位群には目立った変化が現れず、素点を見た限りでは研修前に比べて研修後にスコアを下げた参加者も少なくなかったという点については、説明が必要であろう。考えられる説明の一つとしては、今回上位群に分類したレベルの参加者は、20日間程度のホームステイに必要なとされるレベルのリスニング力やリーディング力には事前に到達しており、研修によって大幅に変化するようなレベルではなかったということがあるかもしれない。また、研修事前テストは通常授業期間中での実施であったのに対して、事後テストは研修後1ヶ月の春期休暇を経て実施であり、研修終了後1ヶ月にわたり英語学習から離れていたためにスコアを落としてしまった参加者が上位群に多かったという解釈も可能かもしれない。あるいは、研修参加自体を目標にしてきた参加者が上位群には多く、そうした参加者は研修参加自体で燃え尽きてしまい、研修終了後1ヶ月を経ての事後テストの段階では、テスト受験に対する動機付けが低くなってしまったのかもしれないといったことも考えられる。この点に関しては、興味深いところであるが、現在のところ十分な説得力のある説明は得られていない。

3.2.3. 研修後の英語運用能力上昇率

表3は、表2で確認された結果を別の切り口で表示したもので、研修参加前後でのTOEIC IPスコア伸び率をパーセントで示したものである。マイナスがついた数値は、研修後のスコアが下がったことを示している。

表3：TOEIC IPスコア伸び率(%)

		リスニング	リーディング	総合スコア
全体 (N=29)	平均値	18.4	8.2	11.7
	最高値	87.0	76.5	71.8
	最低値	-14.8	-39.4	-17.8
	標準偏差	30.24	32.28	21.76
研修前 総合スコア 上位群 (N=9)	平均値	5.4	-5.4	-0.1
	最高値	30.2	28.2	26.6
	最低値	-13.6	-29.2	-17.8
	標準偏差	16.25	22.29	14.12
研修前 総合スコア 下位群 (N=9)	平均値	38.9	25.2	30.9
	最高値	87.0	73.3	71.8
	最低値	-4.5	-12.5	-7.4
	標準偏差	35.51	32.19	24.59

この表からは、参加者全体の「リスニング」パートの平均点上昇率18.4%、「総合スコア」の平均点上昇率11.7%が見て取れる一方で、上位群ではいずれの項目も大きな得点変化は見られず、さらに下位群では「リスニング」で38.9%、「総合スコア」で30.9%といった大幅な得点上昇が見て取れる。

これまでの繰り返しになるが、これは、日本での日頃の学習環境では英語を話す・聞くという活動になかなか積極的に参加できないというレベルの学習者が、積極的に話しかけてくれるホストファミリーに囲まれて、十分な量のexposureを受け、自らも積極的に英語を使用する機会に恵まれたのが理由ではないかと推察される。

野中(2005)では、研修による英語運用能力の伸長にはかなり個人差がある点を報告した。その点は今回の効果測定でも確認されたが、Appendixにまとめた素点を見る限り、研修前比約5割以上アップといった大幅な得点上昇を遂げた参加者が、リスニングパートで6名、リーディングパートで5名、総合スコアで4名、それぞれ確認されるという事実は、研修効果としてはまずまずの成果といえるのではないかと推察される。今後は、そうした研修成功例にあたる参加者のプロファイリングをして、海外語学研修におけるgood learners研究を展開することもできるかもしれない。

4. おわりに

本研究では、短大で実施している20日間の海外語学研修を対象として、その英語運用能力伸長についての効果測定を行なった。今回の効果測定の結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 研修参加後、参加者全体のTOEIC IPスコアの上昇が見られ、統計的に有意差ありと確認された。下位項目については、リスニングパートの得点上昇が確認された一方で、リーディングパートの得点変化は確認できなかった。
- 2) TOEIC IPスコアが460点以上といった英語運用能力レベルが高めの研修参加者については、統計的に有意差ありとされるような得点変化は、いずれの項目にも見られなかった。
- 3) TOEIC IPスコアが350点以下といった英語運用能力レベルが低めの研修参加者については、統計的に有意差ありとされるような得点上昇が、総合スコアとリスニングパートで確認できた。

先行研究である野中(2005)でも述べたとおり、現在日本の教育現場内外で実施されている短期語学研修にはさまざまな種類があるため、今回の結果をすべての短期語学研修プログラムに当てはめることはできない。しかしながら、たとえ20日間という短期間とはいえ、本学で実施しているタイプの研修が特定のレベルの学習者の英語運用能力伸長には十分なインパクトがあることを示す根拠と考えるとよいかもしれない。今後も、研修内容や事前指導を充実させ、より効果的な研修プログラムを作り上げていきたい。

本研究は、先行研究の続報として、英語運用能力養成における「量」についての示唆を与えることのできるデータを蓄積することが目的の一つであった。20日間のホームステイが英語運用能力養成にどう貢献できるかのデータは追加収集できたが、今後もデータの蓄積を続けたうえで、本学で実施している3ヶ月・6ヶ月の短期海外語学留学の効果測定と併せて、研究を継続していきたい。

注

- 1) ITP = Institutional Testing Program。このテストは、英語を母語としない者の英語運用能力を測ることを目的としたTOEFL (= Test of English as a Foreign Language) の問題から編集された、ミニTOEFLともいえる標準化されたテストである。テストは3つのセクションからなり、Section 1 はリスニング能力、Section 2 は文法構造や語法の能力、Section 3 は語彙およびリーディングの能力を測る。各セクションのスコアは50点が、総合点は500点がそれぞれ上限となっている。
- 2) 下記URLで2006年度の研修詳細について参照できる：
研修概要：<http://www.n-seiryu.ac.jp/nonaka/hs2007/>
学生レポート：<http://www.n-seiryu.ac.jp/nonaka/hs07/>
- 3) ここで研修参加者としているのは、研修に参加したうえで、効果測定のための2回のTOEIC IPを受験した学生である。そのため、TOEIC IP実施日に欠席した2名を除外してある。
- 4) TOEIC IP (= Test of English as International Communication Institutional Program) はTOEICの企業・学校向け団体受験方式のテストで、内容およびスコアについては通常版のTOEICと同等のものである。
- 5) 2001～2003年度の研修結果をまとめた野中(2005)では英語運用能力テストとしてITP Pre-TOEFLを使用していたが、本研究ではそれに代わりTOEIC IPを使用している。これは、2004年度にTOEIC受験対策科目を導入したカリキュラム改訂が行われ、それに伴い学内の英語運用能力測定にTOEIC IPを採用する機会が増えたことによる。

参考文献

- 野中辰也、田中ゆき子、隅田朗彦. 2001. 「短期語学研修プログラムの効果測定(1)」『新潟青陵女子短期大学研究報告』第31号, pp.71-78.
- 野中辰也、田中ゆき子、隅田朗彦. 2002. 「短期語学研修プログラムの効果測定(2)」『新潟青陵女子短期大学研究報告』第32号, pp.33-38.
- 野中辰也. 2005. 「海外語学研修の効果測定」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第35号, pp. 7-12.

Appendix : 研修参加者 TOEIC IPスコアおよび伸び率(研修前総合スコア高得点順)

	リスニング		リーディング		総合スコア		伸び率(%)		
	研修前	研修後	研修前	研修後	研修前	研修後	リスニング	リーディング	総合スコア
1	325	295	305	235	630	530	-9.2	-23.0	-15.9
2	310	275	200	160	510	435	-11.3	-20.0	-14.7
3	265	345	240	170	505	515	30.2	-29.2	2.0
4	295	255	210	160	505	415	-13.6	-23.8	-17.8
5	300	345	175	205	475	550	15.0	17.1	15.8
6	275	345	195	250	470	595	25.5	28.2	26.6
7	245	295	225	170	470	465	20.4	-24.4	-1.1
8	295	280	170	215	465	495	-5.1	26.5	6.5
9	280	270	180	180	460	450	-3.6	0.0	-2.2
10	270	230	175	185	445	415	-14.8	5.7	-6.7
11	225	305	220	185	445	490	35.6	-15.9	10.1
12	240	275	165	100	405	375	14.6	-39.4	-7.4
13	260	235	140	135	400	370	-9.6	-3.6	-7.5
14	245	300	150	170	395	470	22.4	13.3	19.0
15	230	215	155	145	385	360	-6.5	-6.5	-6.5
16	220	335	165	155	385	490	52.3	-6.1	27.3
17	290	280	85	150	375	430	-3.4	76.5	14.7
18	230	210	140	155	370	365	-8.7	10.7	-1.4
19	195	310	170	115	365	425	59.0	-32.4	16.4
20	290	270	70	110	360	380	-6.9	57.1	5.6
21	220	255	130	115	350	370	15.9	-11.5	5.7
22	220	210	120	105	340	315	-4.5	-12.5	-7.4
23	235	250	100	165	335	415	6.4	65.0	23.9
24	215	240	95	90	310	330	11.6	-5.3	6.5
25	165	280	110	130	275	410	69.7	18.2	49.1
26	135	240	120	140	255	380	77.8	16.7	49.0
27	115	215	135	160	250	375	87.0	18.5	50.0
28	165	180	75	130	240	310	9.1	73.3	29.2
29	110	195	85	140	195	335	77.3	64.7	71.8
人数	29	29	29	29	29	29	29	29	29
平均点	236.7	266.7	155.3	156.0	392.1	422.8	18.4	8.2	11.7
最高点	325	345	305	250	630	595	87.0	76.5	71.8
最低点	110	180	70	90	195	310	-14.8	-39.4	-17.8
標準偏差	55.82	44.94	53.69	38.04	95.15	71.23	30.24	32.28	21.76

